

大事な小さいこと

つかうかつかってというのが私の悪い癖で、つかうかとお引き受けしてしまつて……。現職（注・現職研究会のこと）の先生方は、大先生、大々先生ばかりで、本当に私はこんなところでお話するつてのは、おこがましいし、どうしようと思つていろいろ考えましたけど、結局は、お魚になるつもりでありますので、どうぞその点は、よろしくお願いします。

昔からいろんな保育のやり方があります、一斉だとか、自由だとか、いろいろ言われていますけど、御存知のように、私は昔から遊びを中心とした形態の中でやらせていただいたものですから、（子どもの生活である遊びですね）その遊びをこわさないで、その中で育っているその子どもを手伝おうという、そういうやり方を根拠において、その中で、私が結局はこういうことが一番大



堀合文子

事なんじゃないのかなということ、拾い出してみましたので、それをちょっと聞いてみていただきたいと思ひます。

○

それは、平凡なことで、先生方もとうに耳にしたり、見たり、知つていらつしやることなんですけれども、三つ位あるのではなにかと思ひます。

その一つは、まず、教師がよく「動く」ということ。これはもう当然のことなんですけどもね。結局、教師が動かなきやいけないつていうことは、もう頭でわかっている。実際家つていうものは、やっぱり、わかっている事それを実践出来る人になりたいなあとと思うのが私の考えで、自分はいまだになれませんが、いろいろ良いお話をきいても、それをそのままやるわけにはいかなから、やはり、それを何か自分の中で消化するなり、糧にし

て、いろいろと子どもに投じてみるとか、そういうことだと思ひます。その教師が動くっていうことも、当然よく知っていることですが、なかなか限界っていうものがあるんだと思ひます。

入園当初は、当然、大変よく動かなければならない。しかし、その時だけ動くんじゃないかと、私は、年齢に関係なく卒業させるまで動かなきゃいけないっていうのが、一口で言えることじゃないかと思ひます。

で、それはどういふことかと言うと、もちろん、入園当初の先生の体の動かし方は、大変細かいかもしれませんが、世話をしたリ、監督をしたり、いろいろ何か要求に答えたり、それこそもう、一人一人を考えている暇もなく動いていなきゃならないっていうのが、入園当初のことですね。

始めは、いっぱいこの辺にくっついて遊べない人がいる。ポヤッとしていられる人がいる、泣いている人がいる——それをもう何とかして遊んでもらおうと思つて努力しますわね。それが一学期かかっちゃうことが随分あると思うんですけど、そういう時に、やれやれ、それがそろそろ、慣れて来ると同時に、友だちも出来たり、まあ遊ぶことも覚えて自分の手から離れると先生は「やつとこのごろよく遊べるようになった。まあやれやれ……」と思ひます。

私は、そこまでは誰でも出来ることで、普通のお母さんでも、子どもが好きで大勢集める人がいたら、一生懸命遊ばせよう、遊ばせようという意識があるだけで、むしろそれだけで遊んでもらえるようになるし、また子どもも遊べるようになって楽しくなる——っていうだけは出来ると思ひます。だけどそれから先はむしろ、子どもが前進しなきゃなりませんわね。ここからが本当の幼児教育が始まるんじゃないかかっていうことは、私申し上げられるんじゃないかと思ひます。

そのこのいわゆる「本当に子どもたちが遊べるようになった」という、その本当の教育が始まるころから先でも、私はやっぱ「やれやれ」といって先生は椅子に坐っているわけにもいけないうし、ゆっくりとその辺を散歩するように歩いていけないうし、やっぱ、そこでも先生が動かなきゃいけないと思ひます。五歳で卒業するまで、そういうことは続くのです。

ただ、ただね、その同じ動いてますけど、その中に世話やなかで夢中になつていた頃と、いろいろ遊びが出来て来たり、子どもたち同志の関係が出来て来た頃と、先生の動き方も、場も違つて来るんだと思ひます。

だんだん進んで来て、子どもたちはもう、先生なんかいらなくて、友だち同志で勝手に、むしろ友だちと遊ぶことが楽しくて、

先生が声をかけても「先生も入れて下さい」と言っても、もう入られてくれない位夢中になって遊ぶようになりませぬ。そういう時「ああ、私も入る余地がなくて、このごろ暇だわ」なんて言うわけにはいかないで、そしたら、それだけ先生が動く範囲ってものはどこにあるのか、っていうものを、見つけなければいけないんじゃないか——それが、やっぱり子どもの遊びの生活を、より豊かにしたり、深くしていく一つの助けになっていくんじゃないかと思えます。

例えば、お食事の仕事にしても、始め小さいうちは、先生が一生懸命になってふいてあげたのも、五歳位になると、どんどん当番のような人がね、順番にやるように変わって来ますわね。そうすると先生は、監督して「あ、うまくいった。どの組の机のふき方がうまいかな」って言って見てるんじゃないかと、先生も共にその辺を片付けるとか、やはり子どもたちだけじゃなくて、何か、その辺に何か、先生の仕事があるんじゃないかと思うんです。

子どもたちが活動していれば、先生も共に動いているっていう、そういう動きってものが、必ず保育室の中にあるんじゃないかと、そういうことを申し上げたいのです。保育室があって、先生がポツンと立って、それから子どもたちだけが動いている。大きくなったら、子どもたちの活動がさかんで、子どもたちが動

いている、先生はそれを見ている——そういった形は絶対じゃないんじゃないかということが、言いたいわけです。

言葉で言えば、ほんとうにこれだけの事なんですけど、先生方に考えていただきたいのは、そこでもって、子どもと先生の間に生まれるものが何かってこと。ただ動けば良い、じっとしていちゃいけない、坐ってちゃいけない、ただ動いていりゃ良い——というんじゃないかと、何かしら幼児の生活にプラスになるものとして動く行動がなくちゃいけないんじゃないかと——これは頭でわかっていても、なかなか出来ないんですけどね。子どもが充分一人で出来てしまうと、どうしてもそこがぬける。私も経験しておりますけど、苦勞をしてやるところまで来たっていうんで、つい安心しちゃって、ぬけてしまうんですね。それがやはり、穴になっちゃってしまふんじゃないかと思つて、これの一つ取り上げてみました。(幼児が動いているその時の先生は、勝手に自分の事で動いているのでなく、先生の神経は常に幼児一人一人の上であり、幼児の行動から神経ははなれていないのです)。

○

それから次は「遊ぶ」っていうことです。これも前のお話と関連してまずけれど、小さい時は遊んであげる方で、一生懸命遊具を仲立ちにしたり、何か競技をするとか、ごっこをするとか、い

ろいろして遊びますね。そのうちにどんどん遊びつてものが出来て来まして、さっき申し上げたように、むしろ友だちと遊ぶのが楽しくなる時期つてものが必ずまいりますね。そうするともう、先生がういてしまうわけです。

ところがそれで「子どもたちが遊んでるんだから、あれで充分だ。もう先生は入ってなくて良いんだわ。ただ危くないか見てれば良いんだわ」それじゃだめなんですね。子どもが充分遊べるようになって、もう先生の手がいらなくなったと思つた時に、もう一回、そのもう一回をいつやったら良いのかつてのは、先生方が御自分で子どもたちの遊びを見て、その時期をちゃんとつかまえて、本当にもう一回子どもたちの遊びの中に入らなきゃならない。ですけど、その時期がこういう時期ですよつていうのは、私ここでは言えないんです。(幼児がみなちがうので、これは先生が観察して考えていく事で、殆んどみなちがうはずです。)それは先生がよく先生が遊びを観察なさつて、そして、今度入る時はちゃんとその人の友だちとなつて、自分が子どもになつて、この大きな人間を、むこうから見て大人つていう抵抗、先生つていう抵抗じゃなくて、「あの友だちが来た」つていう位で入れるような、そういう遊び方をしていつてあげて、また遊びの深さを作つていく。

「あのグループは何かこう、ちょっと入つた方が良い」とか「あ、あのグループはこうだから」とか、それは確かにあるはずですよ。それは、受け持つていらつしやる先生には、ちゃんとおわかりになつてはいますから、そういう時にそこの中に入つて、一緒に遊ぶということ、遊びというのは、そういう段階をふんでいくのが大事なことじゃないかと思ひます。

それで実は私、最近失敗したんです。私も今五歳児を受け持つてますけど、自分でも、五歳になつたつて遊んであげなきゃだめなんだ、はなしたらだめなんだとわかつていたんです。でも、私に何か作つてくれ、描いてくれとか、そういうことが大変忙しかつたもんで、ついそちらの方にかまけていてね。そうすると、砂場でも、もう水を入れたりなんかしておおいにやつてはいるわけ。ところがね、どうもちょっとなんかおかしいの。それが何かおかしいのか、遊んでないんじゃない、遊んでいるの、だけど何かちよつと違う。それで、私も今日は少し砂場に行つてみようかと思ひました。もちろん「入れてちょうだい」なんて言つて入つたわけじゃない。砂場はお水でいっぱいになつてますから、そこへ黙つて入つて、黙つてこうやつて。自然とこう入ると、子どもの方も「入れてあげよう」とか「先生入るの」とか、そんな声かけなくても、自然と入れてくれたわけね。で、まーやつていました

の。そうすると、その間に、子どもたちの会話がどんどんそこでなされるわけですよ。水を入れること、掘ること。「や、だめだよ、誰ちゃんが何とかだよ」とか「山を作るんだよ」とかいろいろ会話があるんですよ。そこで初めて私は、ほんとに早くここへ入って来るべきだったって気付いたんです。

そこには何も育ってない。外側から見れば仲良く話し合って、上手に山を作り、ダムを作ってやってるんだと今迄思ってたのが、全然くつがえされちゃった。育ってないっていうのは、ま、言いながら人のものをこわしてみたり、こわすとその人が怒ってみたり、いわゆる精神的なものが育ってなかったんです、私が思ったようにはね……。誰ちゃんがだめなんだよと、すぐそういう風に人のことばかり言うのは、大変困るわけですよ。そういうことをさせないように、日頃遊びの中でいろいろ育てるわけですよ。こわしたら「ほくも手伝うよ」とか、そこにいろいろあって欲しい。人間として、ちゃんとした性格に育って欲しい……と私なんかは期待してるんです。遊びとして乱暴にこわしたりするんなら良いけど、そうじゃない、人間としていやな面を見せつけられちゃって、あー、こういう面が育ってないんだな、一緒にそういう所へ私があまり出ていかなかったので、ブランクを作っちゃったんですよ。

そうかと言って「あなた、そういうことを言うんじゃないのよ」「そこは、そういうこと言っちゃあ……」といちいち言ったら、その人たちの遊びはこわれてしまいますから、そういうような言い方でそこを育てようとは思わなかったですけど……。

まず私が一番情なく、びっくりしたのは、外側から見て「このごろは何か大きい組になって、よく遊ぶようになった」なんて安心していて、大まちが良かった——と。やはり、大きい組になったら、大きい組になっただけの、そういう面を育てるといふ所が欠けていたんだと、遊びの中に入ってわかったんです。

遊びってものは、ただ鬼ごっことかそういう遊びじゃなくて、本当にあの人たちの生活なんですから、その中でいろいろと、良い物を吸収していつてもらいたい。先生が良い事ばかりするとは限らないけれども、やはり、遊びってものを良い方向へ向けていってあげる。それからまた、心と心の通じ合い、友だち同志の心のやりとり、それからいろいろな知的なこと、そういうものもやはり正しい方向よね……人のことばかり言って自分が良い子になるうとか、いろいろあるでしょ……大きくなれば大きくなるほど、そこに頭を働かせる知能が発達して来れば、悪い方になって使いますからね……それを良い方に使うように、何かのことで気付けるとかするようになっていくには、私はやっぱり一緒にな

って遊ぶ必要があると思います。

ただね、一緒になって遊びましょ、今日も、明日も、明後日も……というんじゃないくて、やっぱりさっき言ったように、入園当初とか、三歳の小さい人たちならほんとに一緒になって遊んで、その中で育っていくんですけど、五歳になるとそうじゃない。自分たちで自由に、大人が全く入らないで、少し位悪いことをしても良いような、のびのびとした自由を味わわせるのも必要です。監督下にある自由じゃなくて——本当は、先生はこっちにいたって、ちゃんと監督してらんですけど——何も干渉しないで、むしろあしよと思うてもがまんして「今はそーっとしておきましよう」っていう時期もなきや育たないんですよね。だから、先生が共に遊んだり、そーっとしておいたりとかみ合わせ、それをうまく機会を捉えてやってゆくのが技術じゃないか、そうすれば、子どもたちも遊びの中で、いろいろ育つんだと私は思うんです。

これだけで、幼児の教育は終わったと思う位、ここの所は大事だと思えますね。それは、我々が自分で考えてやるより他ないんです。誰に教えてもらうんじゃない。その元は教えてもらっても、あとやるのは私たちじゃないんで、私たちが、その場で考えてやっていくしかないんです。自分の目の前にお子さんをおいて育て

るんですから、自分でそれぞれにまかされたことだと思えますね。で、それをうまくみ合わせてやっていくと、うまく育つんじゃないか、それが一番、遊びということの大きなことじゃないかと思えます。

○

それからもう一つは「行動」です。さっきの「動く」というのに似てはいますけど、それはどちらかというと、事務的にただ、体を動かすことだけど「行動」の中には、先生がしゃべりもしなきゃならないですよ、それから歩かなきゃならないですよ、それから飛んだり……いろいろありますわね。そういうものっていうのは、何て言ったら良いのかわからないので、一応「行動」と呼んでみたんです。

特に日常の会話、私それはとつても大事だと思えます。さっきの遊びと同じように、すぐく神経を使います。保育室へ一歩入ったら「おはようございます」そこからもう始まるの。これを気をつけていくと、随分違うんだと思うんです。

どういう風にやっていくかという、まず自分が失格でおはすかしいんですが、声ね。声って、あの歌うような声、その声です。朝から一歩入って歌を歌うんじゃないけど（笑い）結局はそういうことに影響するということ。だから私なんか、本当にお子さ

んに悪いなあど、こんなに低いどら声でしゃべったら、みんな耳が悪くなっちゃってね。(笑い)だから、良いお声の方を私はうらやましいと思うんです。しゃべる声の高さだって、影響すると思うんですよ。いつも低い声だと、何かこう、活発な明るい組とはならない。そうかと言って、大きな声でワァーとしゃべると(笑い)、大変落ち着かないというのは、よく言われることでしょ。

声だけじゃなくて、音色とか、音程とか、リズムとか、いろいろな要素がありますね。そういうのがみんな子どもに影響するんだと思います。そこはもう、つくづく自分が出来ないから……もつとああだったら、あの人たちもつとああなるだろうと本当につくづく感じますものね。それだけに、声つてものは大事です。音楽教育につながるものです。

それからもう一つ大事なのはね、これは生まれつきじゃないから、ちょっと考えれば出来ること。同じ言うにしても、言い方です。例えば、「あ、こうした方がいいんじゃない」と大変やさしく言う。良いようですけど、「いいんじゃない」と言っただけじゃなく、「いいんじゃないかしら」と言っただけじゃなく、「なさいよ」までは言わなくても、「こうした方がいいんじゃない。ああした方がいいんじゃない」と、しょつ中そ

んなことばかり言っていたら、みんな受け身ですよ、子どもは。子どもの方を考えてみると、「あ、そうかそうか。こつちをしよう」今度またこつちで「あ、そつちの方がいいんじゃない」「あ、そうかそうか」と。「そうだ、そうだ」としか頭の働きに刺激しないわけですよ。

そうじゃなくて、「あの先生、あんなことをしているな」「あのお友だちあんなことしているな。僕もやってみよう」「あ、やってみてわかんないな」という風に自分から頭を働かせると、脳の神経にいく刺激が違うんじゃないかと思えます。これは教えていただかないとわからないんですけど、私の素人なりの考えですと。

「こつちの方がいいんじゃない」「あそうか」だけでは、今度自分から考えようっていう時には、もうその刺激が薄いもんだから、自分でっていうともう「どうすんの、どうすんの」という事になる。先生方もよく御経験がおありになると思うけど、知らないうちに私もよくやっているんです。

それから、ごあいさつにしても、「あしたから言いましたよね」「なんて約束しておいて、「おさようございます。どうしたの？ おはようございますは」と、とってもやさしく、ニコニコして言うてもだめなのよね、それは。それよりも、こちらの方が先に「お

はようございます」といねいに、何度も、何日もやってあげる
と自然にやるようになる。それこそ時間……日数はかかりますよ
ね。でも、自分が気づいて自然に頭が下がるか、それとも、ごあ
いさつしなきゃと気がつくか、先生がおじぎをするから自分もす
るとか……何かそのうちには、自分の知恵っていうものが出来
て、そこにプラスされるものがあるでしょう。

そういう風に、やっぱりどうしても、自分からっていうのが大
事で、それが倉橋先生がおっしゃった自発性、つものに通じるん
じゃないかと思えます。自発性ってものを尊重するっていうの
は、そういうのですね。何しろ、自分からこうして考えて、いろ
いろ気がついてやって、自分からっていう気持ち育てないと、
前に話したように、同じ遊んでいても、その中をよく見るとそれ
こそよくみると、違うということになる。

遊びだけじゃなくて、しつけにしても、製作にしても、何でも
自分からやったのは、やはり自分で意欲をもってやるんですか
ら、そのお子さんのものになるんです。その力になるんですよ
ね。それでちゃんと身についたものは本当にとれないんです。

そういうことで、会話っていうものは、うっかりすると自分で
はやさしく言っているつもりでも、おさえつけばかりで、先生の
命令どおりにみんな動かしているような、そんなやり方になって

しまうんじゃないかと思うんです。私も、よっぽどそこに気をつ
けないと、時々あつと我に帰らないとだめなんです。これは持つ
て生まれたものというんじゃないかと、努力すれば出来ることじゃ
ないかと思えます。そのかわり、考えなくちゃいけません。考え
て言わなくちゃだめですわね。だけど、いつまでも考えてると、
そのうちに子どもは行動は違ってきたから（笑い）はっぱっ
とやって、間違ったら直すような練習をしながら、うまくなるん
じゃないかと思えます。

それで、さっきの声だとか、声の音質だとかっていうのは、み
んな音楽につながるもので、いちいちお遊戯室に集めたり、ピア
ノを弾いて歌ったりしなくても、先生の良い声も、いい声じゃな
くてもリズムがあれば、それも皆音楽につながるものです。先生
の行動っていうのは、そういう風にとても大事。

これは私が考えたわけじゃなくて、いろいろ教えていただいた
り、また子どもとらめ合わせながら思った事なんですけど、こ
のごろは気をつけて、子どもたちの中を歩く時でもきれいに歩
うと思っているんです。それが、はっと気がついた時だけきれい
に歩いたんじゃないか……だから無意識に行動がきれいな動
きになるようにならなきゃ、だめなのね。はっと気がついた時だ
けやるんじゃない、子どものリズムもくずれてしまうわけで、先生の

動きがリズム感に、そして表現につながると考えてよい事で、日常の教師の音楽的要素が幼児の音楽的舞踊的要素を育てていくのです。日常が本当に大事で、子どもってというのは、みんな吸収してもっていつてくれますからね。帰ってくるのはみな教師の行動性格すべてになるわけです。

例えば、昔はね、ボタン一つかけるんでも、たとえ時間がかかってもゆっくり自分ではめさせて、それをいつまでも待ってた方が良いみたいに言われてましたわね。ところが、子どもはもう、本当に吸収してるんですから、私はこのごろみんなかけちゃう……。入園当初はみんなかけてあげる。そのうち、いつのまにか、それこそふっと一人でかけられるようになるのね。やっぱりこれは、その人によって手の運動や機能が発達する時期ってものはこちらがうのですよね。さあつとかけられる時期が来ると「ああ、今日はあなた、上手にかけられたわね」ってほめてあげて、それからもうかけてあげなくて良い。それをね「さあみんな、かけてごらんなさい」と口だけで先生は説明して「みんなできるでしょ。先生待ってあげるから、みんなできるわね」って言って（笑い）。そうすると、みんな勝手にやるわよね。そうすると、大きくなっても、ボタンがちよっと間違っかけてもすましていたり、面倒くさいお子さんは、かけないで、フーフーフーとして帰るように

なっちゃうのね。でも、はじめのうち先生がかけてあげてからは、そういうことは絶対にないですよ。

それからもう一つ。実は、手ぬぐいを一週間に一回持って帰るんですが、「こうやって持っていくのよ」と口で言っ、やらせればやれないことはないんです。それはいいんですけど、私は、何も口で言わないでサッサと「あ、今日は手ぬぐいを持って行きましょうね」って、皆に包んであげちゃうんです。ビニールにちゃんと入れて。大人がやるから、きれいにね。それを何回も持たせるわけ。そうするとそのうち「あたしやる」って。「あ、あなた出来るの。入れてね」って言って、一つずつ手をはぶいていけば良い。そのかわり、始めは大変ですよ。先生はその時間、トットトット……と、もうゆっくりなんてやってたら（笑い）帰りがのびちゃうからだめでしょ。でもそういう風になるとね、五歳位になって自分たちでやるような時期になったら、決して変な風に、グチャグチャ入れちゃうとかってことはないんです。それも私は経験で、やっぱりやってあげて良かったな！と思うことがあります。

だからそういう風にやっぱり、こっちの行動がみんな返ってくるんです。こっちのしてあげたことが……。先生のすることが、みんな真似されちゃうっていう御経験があたりだと思えますけ

ど、そういう事から今度逆に言うと、さっきの歩くこと一つでも、みんな吸収していってくれますから、よっぽど気をつけてないだめだという事です。みんなそうやって結局は先生の行動と
いうところへ返って来ますのでね。

そうかといって、いちいち神経を使って——もちろん頭と体と神経と、それだけはもうどうしたって使わなくちゃね、しょっ中使っ
てなきゃならないのが、我々の仕事ですからね。しかし、いちいち「あ、今はこうやってきれいに歩かなくちゃ。あ、今は……」なんて言っていられないでしょ。そんなことしたら、こちら
もまいっちゃいますよね。毎日のことで。だから何も神経を使わ
なくても美しく歩いて、良い声を出して、ちよっとお話もしてあげられて、それから、ちよっとチョウウチョがひらひら飛んでいた
ら、いい声で歌を歌ってあげて。またみんながタッタカ一生懸命
踊り始めるでしょ。そういう時に、ちよっとレコードをかけてあげて、一緒に
なって素敵に踊れたら……そういうのが私の理想なんですけども、な
かなかそうはいきません。半老骨にムチ打って、やっぱり返って
来るものは自分だと思って、まだまだ人生足りない位勉強しな
きゃならないと思っております。

○
先生方はどうぞ、私の轍たなをお踏みにならないように、先生方、

お若いんだから、子どもを教育しようと思わず、自分をみがいて、自然とそこ
からしみ出る教育ってのが、やっぱり幼児教育のもとになるん
じゃないかと考えております。私なんか気づいたのが遅いもので
すから、自分をみがく暇が本当に足りないんで、今困っております。
先生方は、今もしていらいっしやると思いが、いくらやっても
やりたりないのが、相手が幼児ですからね、大人じゃない、幼
児ですから、いくらみがいたって、みがきたりするという事はない
と思えます。

○
そういう事をお互いに現場にいる者は、気づいていくというのが、私
たちの収穫であるとも言えると思っております。

大変もう、みなさんの知っていらいっしやる事しか申し上げられ
なくて、お恥ずかしゅうございます。

○
〈質問〉五歳のクラス、青、赤レンジャー遊びがはやっていて、
一緒に遊んで遊んでいるけど、ぬけられない。遊びからのぬけ方
について。

〈答〉五歳ならぬけられなかったら、ぬけなくて良いと思うん
です。そこで一日遊んじやって。そのかわり、あっちの方の人はど
うだろうと時々、首をのぼして見る。監督は必要ですからね。青
レンジャーとか赤レンジャーとかありますよね。良いんじゃない

ですか、遊んじゃって。(笑い) だけど担任っていうのはいろんな事がおきてきますね。やれけんかしたとか、誰が何とか、そして「青レンジャー、行ってきまあす」(笑いワァー!!) って言っただけでいんじゃないかしら。そのかわり必ず帰って来なくちゃいけないの。たとえ一時間でも二時間でも、必ず帰って来る。そこに大切さがあると思うんです。信用ね、心のつながりが出来る。だから私は夢中になってお入りになることがむしろ大切だと思います。

〈質問〉四歳児のクラス。遊びの中に「先生」として入っていくことはどうか。

〈答〉四歳のうちは、まだまだ遊んであげる方ですからね。先生として入っていいんじゃないでしょうか。ただね、例えばお砂場でごちそう作っていたら「ごめん下さい。これ一つおいくらですか。このジュースいただきます」とか、自分もおだんごを作ったら「おいしいごちそうあげますよ」とかね。おすべりですべっていたら、そこでどうやるとか、いろいろあるでしょ。そこに入っただけで、広がりが出てくるように。まだ遊びがそんなに深くないですから、先生との遊びで育っていくのです。

〈質問〉片付けについて。先生が動いてしまうと、子どもがやら

なくなるのではないか。

〈答〉片付けは一つのしつけどからっていうと、「もうお弁当ですよ」って言うときみんなきれいに片付ける。そのあと遊ばないのかと思うと、またすぐ遊ぶんですよ。紙くずの中でお弁当食べるのもまずいですが、また遊ぶのだから、出しておくものがあるのも良いと思うのです。片付けていうのは、いろんなやり方、考え方がありますよね。

それから年齢によっても違います。入園当初は先生が一人で片付けてしまう。しばらくすると「誰ちゃん、お手伝いして。誰かとか遊びにして子どもの方に返すようにします。カゴを持ってブロック屋さんです。ブロック落ちてませんか」と言っても、ただ歩くだけじゃだめなのよ。「落ちてませんか」と言いながら、すぐ自分で拾わなきゃ。(笑い) 子どもに返しながら、先生もどんどん動く。またいろいろ発達して来て、夢中になる時期が来るでしょ。そういう時、例えば「砂場片付けましょう」と言ってもやり出したら、私ばかり片付けている。(笑い) これで良いのかしらって思ってた。もう一度よく子どもを見直したわけ。そうしたら、子どももやってくるの。全然やってないで、私にまかせているわけじゃないんですね。でも片付けることも遊びになって

るわけで、大人から考えると同じ茶わんを砂をはらったり、入れるのも時間がかかるわけ。私も大人だから先はっかり考えてしまいうけど、時間をかければ、本当に心ゆくまでやらせれば、大人がやるよりきれいにやってくれます。だから、そういう時は、時間をかけてやった方がいいかもしれませんね。

それからやっぱり人によって波があつてね。昨日一生懸命片付けた人も、今日はダラダラしていたりする。また能力が発達して来ると、要領よく頭を働かせて、ずるをする人もいますよね。そういう時には、「今日はあなたはあれを捜して来て下さい」「みんなやっているから、あなたもお手伝いして」と命令していいと思うんですよ。頭の良い方に働くようにしなきゃいけないし、ブランドだったら、みんなと一緒にやるという形でひきずってあげたら良い。私の片付けっていうのは、みんなでするっていうのと、自分たちの所だけじゃなくて、皆の所をやる。意味が広くなるわけね。そういう風に同じ片付けでも、少しずつ広げていってあげたいと思います。でも何しろ、言葉で言うより、言ったと同時に自分しなきゃだめね。それだけは言えると思います。

〈質問〉保育者が、自分をおさえる事と、感情を出す事について。
〈答〉教育するっていう事は、一つの芸術じゃないかと思えます。だから、やっていくのに、ある程度先生はお芝居しなきゃい

けないんじゃないかと思うんです。本当に子どもと同じ気持ちにならないんじゃないかと思うんです。子どもにならなきゃいけない。大人でいたらだめなのよね。そういう風に人を変えちゃう位やらないと、子どもに通じないのね。それに、いやな事があってもニコニコしなきゃならない。これもある程度お芝居よね。

こんなにお芝居してどうなるんだらうって私も思います。こうワァーッと怒りたい時だってあるわよね。(笑い) そういう時って、ワツと怒らなきゃならない時もある。感情をおさえたのかえってへだたりが出来たりする場合がある。だから、もし怒るにしても、真剣に怒る。変な時に怒っちゃいけないから、やっぱり自分が判断して、本当に怒っていいと思ったら怒るのね。

こちらの気持ちってものは子どもは純粋に受けとめてくれますから、それだけこつちも、変な大人の感情をぶつけてはいけないんですね。ただ、その所は確かに子どもに教えられてわかっていくんじゃないかと思うんです。そういうわけで、うまく御返事できないんですけど……。(拍手)

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

(六月三日に行われた現職研究会での講演を収録したものです)